

# 1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和3年11月)

野菜振興部 調査情報部

## 【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は12万3074トン、前年同月比99.4%、価格は1キログラム当たり215円、同103.0%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は4万228トン、前年同月比96.0%、価格は1キログラム当たり204円、同109.1%となった。
- 東京都中央卸売市場における指定野菜14品目の価格のうち、平年を下回ったものは、レタス類（平年比58.6%）、はくさい（同60.5%）、だいこん（同62.2%）、にんじん（同66.6%）、キャベツ類（同68.8%）、ねぎ（同69.3%）、ほうれんそう（同71.4%）、ピーマン（同74.3%）、きゅうり（同76.3%）、なす（同86.9%）、さといも（同92.0%）、平年を上回ったものは、たまねぎ（平年比202.8%）、ばれいしょ（同157.9%）、トマト（同102.9%）となった。
- 首都圏の需要を中心とした1月の見通しは、トマトやばれいしょやたまねぎは若干不足気味であろうが、その他の品目はこの時期に起こりがちな価格上昇はないと予想される。果菜類は重油代の高騰下、厳冬期でもあり徐々に供給が細って価格は上昇気味に推移すると予想される。コンビニエンスストアのおでん需要により、低迷しただいこんは徐々に価格上昇基調になると予想している。

## (1) 気象概況

上旬は、全国的に天気は周期的に変化した。2日から4日にかけて、北日本をゆっくり通過した低気圧や上空の寒気の影響により、大気の状態が不安定となった。このため、北海道や青森では局地的な大雨となった所があった。その後、7日頃にかけては北・東・西日本では高気圧に覆われて晴れたところが多かった。一方、東シナ海から日本の南に進んだ低気圧や前線の影響で、沖縄・奄美では曇りや雨の日が多かった。8日から10日にかけては、前線を伴う低気圧が中国東北部からゆっくりと東進し、北海道に進んだ。このため、低気圧、前線や寒気の影響で全国的に雨が降った。旬平均気温は、北日本でかなり高く、東日本で高かった。一方、沖縄・奄美で低く、西日本では平年並だった。旬降水量は、北日本太平洋側でかなり多く、北日本日本海側、東日本、西日本太平洋側と沖縄・奄美で多かった。西日本日本海側では平年並だった。旬間日照時間は、北日本日本海側と東日

本で多かった。一方、北日本太平洋側と沖縄・奄美で少なく、西日本では平年並だった。

中旬は、東・西日本を中心に晴れた日が多かった。前半は、西日本中心の西高東低の冬型の気圧配置が持続した。このため、東・西日本太平洋側を中心に晴れた日が多く、西日本と沖縄・奄美は気温が低い日が多かった。一方、寒気の流入が弱かった北日本は、気温の高い日が多かった。後半は、北日本太平洋側と東・西日本を中心に、帯状の高気圧に覆われて晴れた日が多かった。旬平均気温は、北日本でかなり高く、一方、沖縄・奄美で低かった。東・西日本では平年並だった。旬降水量は、東日本太平洋側でかなり少なく、北日本太平洋側、西日本と沖縄・奄美で少なかった。北・東日本日本海側では平年並だった。旬間日照時間は、北日本太平洋側と東・西日本でかなり多く、北日本日本海側と沖縄・奄美で多かった。

下旬は、21日から24日にかけて、偏西風から切り離された動きの遅い低気圧が発達しながら、日本海北部からオホーツク海に進んだ。

この低気圧、前線や寒気の影響で、全国的に雨や雪が降り、北海道上川地方で24日に記録的な降雪量となった地点もあるなど、大雨や大雪となった所もあった。旬平均気温は、北日本で高かった。一方、沖縄・奄美で低く、東・西日本では平年並だった。旬降水量は、北日本日本海側と西日本でかなり多く、北日本太平洋側と東日本日本海側で多かった。東日本太平洋側と沖縄・奄美では平年並だった。旬間日照時間は、沖縄・奄美でかなり少なかった。一方、東日本太平洋側と西日本で多かった。北日本と東日本日本海側では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図1）。

## (2) 東京都中央卸売市場

11月の東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は12万3074トン、前年同月比99.4%、価格は1キログラム当たり215円、同103.0%となった（表1）。

図1 気象概況



表1 東京都中央卸売市場の動向（11月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格の推移 (円/kg)		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	123,074	99.4	99.5	215	103.0	87.5	224	212	209
だいこん	11,607	98.5	97.5	55	93.9	62.2	67	53	44
にんじん	7,934	106.5	109.7	103	75.6	66.6	106	107	94
はくさい	15,781	102.4	103.3	42	123.6	60.5	50	43	34
キャベツ類	15,458	102.6	105.0	68	109.7	68.8	80	67	56
ほうれんそう	1,826	107.5	136.1	391	95.2	71.4	469	350	366
ねぎ	5,395	104.3	102.8	228	74.9	69.3	234	223	226
レタス類	7,013	98.5	104.2	139	115.9	58.6	160	130	127
きゅうり	5,191	102.3	109.2	297	94.0	76.3	314	282	295
なす	1,944	104.6	108.6	398	96.6	86.9	403	381	414
トマト	4,479	89.7	96.2	512	110.7	102.9	512	476	555
ピーマン	2,041	108.8	110.4	356	83.2	74.3	372	370	327
さといも	1,071	113.6	104.4	260	95.4	92.0	252	256	275
ばれいしょ	5,951	87.4	84.4	195	141.7	157.9	183	196	205
たまねぎ	8,151	89.4	80.8	169	226.7	202.8	155	172	180

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が月間を通して苦しい展開が続き、安めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年を4割近く下回った(図2)。

葉茎菜類は、レタスが潤沢な出回りから価格を下げ、大幅な安値で推移した前年を1割以上上回ったものの、平年を4割以上下回った(図3)。

果菜類は、トマトの価格が、熊本産の入荷減

から堅調に推移し、やや安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をわずかに上回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が、絶対数不足から引き合いが強く、なかなか落ち着きを見せず、安めに推移した前年の2.2倍以上、平年の2倍強となった(図5)。

なお、品目別の詳細については表2のとおり。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

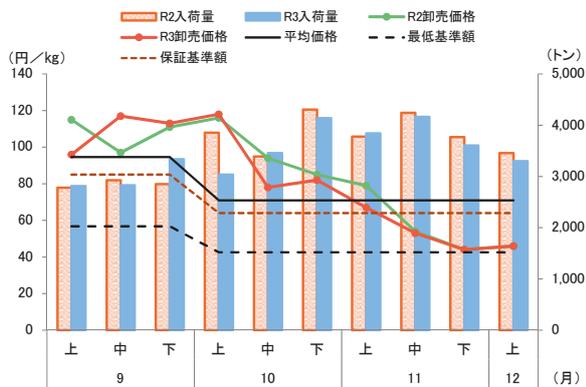


図3 レタスの入荷量と卸売価格の推移

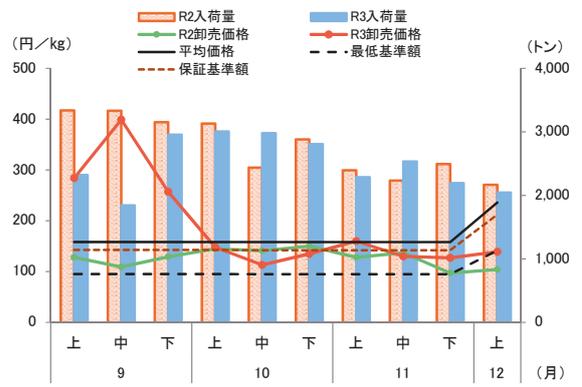


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

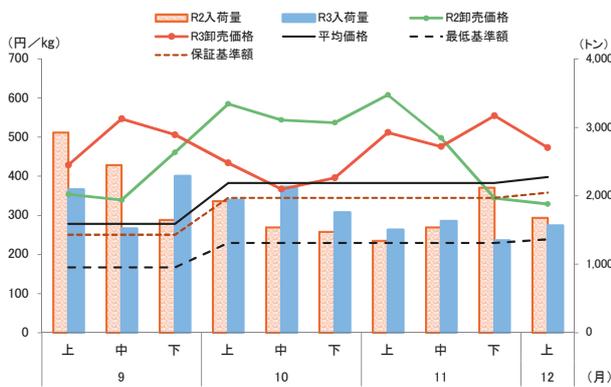
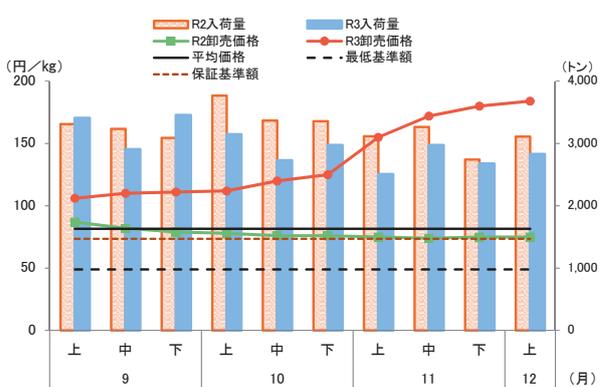


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるには限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	11月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	千葉産を中心に神奈川産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、天候被害や病虫害も少なく順調で品質良好。神奈川産も10月上旬の大雨・強風の影響があったものの、生育はほぼ順調。若干の病虫害が散見される。総入荷はやや少なめに推移した前年、平年ともわずかに下回った。 価格は月間を通して苦しい展開が続く安めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年を4割近く下回った。
	にんじん 	千葉産を中心に終盤の北海道産の入荷があった。千葉産の作付けは前年並みで8月の大雨の影響で一部まき直しがあったものの、その後の天候に恵まれ生育、肥大ともに順調。北海道産は終盤で、高温干ばつの影響での生育不良であったが天候の回復と適度な降雨で肥大回復した。総入荷は前年をかなりの程度上回り、平年を1割近く上回った。 価格は端境なく順調な出回りから苦しい展開となり、安めに推移した前年を2割以上下回り、平年を3割以上下回った。
葉茎菜類	はくさい 	茨城産を中心に長野産の残量の入荷もあった。茨城産の作付けは前年並みで、10月中旬以降の気温の低下でやや生育遅延が散見された。一部病害が散見されるも天候の被害はなく順調。長野産も天候の被害なく残量は例年より多い。総入荷量はやや多かった前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。 価格は日中暖かい日が多く、大幅な安値で推移した前年は2割以上上回ったものの、平年を4割弱下回った。
	キャベツ類 	千葉産中心に愛知産、茨城産の入荷があった。千葉産の作付けは前年並みで、適度な降雨と日照で生育順調。愛知産も作付けは前年並みで天候に恵まれ生育順調。茨城産の作柄もおおむね良好。総入荷量はやや多かった前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。 価格は不足感なく中旬以降苦しい展開となった。大幅な安値で推移した前年は1割近く上回ったものの、平年を3割以上下回った。
	ほうれんそう 	群馬産を中心に茨城産など関東産中心の入荷があった。群馬産の作付けは前年並みで、10月の温暖な気候からやや前進傾向。一部で病虫害が散見された。茨城産は価格低迷が続くこまつなからの転作で面積増加した。群馬産、栃木産の高冷地は終盤だが残量は多かった。総入荷量は多かった前年をかなりの程度上回り、平年を3割以上上回った。 価格は露地もの前進など不足感ない潤沢な入荷から、安めに推移した前年をやや下回り、平年を3割近く下回った。
	ねぎ 	東北産の残量を中心に、関東産の秋冬作の入荷があった。大きな天候被害なく東北産の残量は例年になく多い。関東産も茨城産の作付面積が前年を大きく上回っている。8月の降雨により一部生育の停滞がみられた産地も、その後の天候により回復した。一部病虫害が散見されるものの、太りも良く品質も安定。総入荷量は前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。 価格は気温の高さと不足感ない入荷で苦しい展開となり、やや安かった前年を2割以上下回り、平年を3割以上下回った。
	レタス類 	茨城産中心の入荷となった。作付けは前年並みで10月中旬以降の気温の低下や干ばつで一部生育停滞が散見されたが、各産地天候被害もなくおおむね順調。総入荷量はやや多かった前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。 価格は中旬以降ピークとなり、潤沢な出回りから価格を下げ、大幅な安値で推移した前年を1割以上上回ったものの、平年を4割以上下回った。
果菜類	きゅうり 	埼玉産、宮崎産、群馬産中心の入荷があった。埼玉産の作付面積は前年並みで一部病害の発生も散見された。宮崎産も作付けは前年並みで活着、生育ともにおおむね順調。群馬産も作付けは前年並みでおおむね順調も、曇雨天と低温の影響で草勢がやや低下。総入荷量はやや多かった前年をわずかに上回り、平年を1割近く上回った。 価格は不足感ない入荷から、安めに推移した前年をかなりの程度下回り、平年を2割以上下回った。
	なす 	高知産中心の入荷となった。高知産の作付けは前年並み。10月の安定した天候から生育順調で、一部病虫害が散見されるも着果量も安定。関東産は生育遅れと大きな天候被害がなかったため、残量が比較的多かった。総入荷量はやや多かった前年をやや上回り、平年を1割近く上回った。 価格は安めに推移した前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。
	トマト 	熊本産を中心に、千葉産、愛知産などの入荷があった。熊本産の作付けは前年をやや下回り、10月までの高温で草勢の低下が見られたが回復した。生育はおおむね順調も病害の発生と拡大が懸念される。関東産の作付けは前年並みで、抑制ものは病害の発生が例年より多くみられたものの、作柄は例年より良好。越冬作についても病害が散見されるもおおむね良好。総入荷量は前年を1割強下回り、平年をやや下回った。 価格は熊本産の入荷減から堅調に推移し、やや安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をわずかに上回った。

	ピーマン 	茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで10月中旬以降の低温で生育が遅れがみられた。後続の宮崎産、高知産も作付面積は前年並み。やや虫害の発生が多い傾向もおおむね順調。総入荷量は前年を1割近く上回り、平年を1割強上回った。 価格はやや安めに推移した前年を2割近く下回り、平年を2割以上下回った。
土物類	さといも 	埼玉産中心の入荷となった。作付けは前年並みで、天候に恵まれて肥大も良く生育順調。収穫作業も順調に進んでいる。中国産の輸入は前年をわずかに上回っている。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をやや上回った。 価格はやや安めに推移した前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。
	ばれいしょ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで収穫は終了。降雨が少なく高温干ばつの影響を受け小玉傾向。総入荷量はやや少なかった前年を1割以上下回り、平年も1割以上下回った。 価格は単価高で引き合いはやや落ち着くも、気温の低下から需要喚起されて堅調な価格となり、高めに推移した前年を4割以上上回り、平年を5割以上上回った。
	たまねぎ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで収穫は終了。降雨が少なく高温干ばつの影響を受け小玉傾向。中国産の輸入は前年の3倍以上となっている。総入荷量は少なかった前年を1割強下回り、平年を2割弱下回った。 価格は絶対数不足から引き合いが強く、なかなか落ち着きを見せず、安めに推移した前年の2.2倍以上、平年の2倍強となった。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

### (3) 大阪市中央卸売市場

11月の大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は4万228トン、前年同月比

96.0%、価格は1キログラム当たり204円、同109.1%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(11月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格の推移(円/kg)		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	40,228	96.0	100.8	204	109.1	90.5	211	203	197
だいこん	3,838	94.2	97.0	68	94.4	71.1	77	63	65
にんじん	2,934	106.1	109.4	103	75.7	67.8	98	107	103
はくさい	6,438	104.5	123.7	54	135.0	66.3	58	56	48
キャベツ類	5,038	102.8	117.4	73	117.7	74.2	95	72	55
ほうれんそう	616	95.8	115.5	514	107.5	83.4	607	490	455
ねぎ	1,231	110.4	110.4	360	89.1	77.9	370	355	355
レタス類	1,564	98.1	108.8	142	121.4	58.8	166	130	128
きゅうり	1,123	106.1	123.7	279	96.2	76.0	296	268	273
なす	480	93.8	106.1	368	92.5	83.1	372	364	370
トマト	1,125	73.1	93.1	503	115.6	103.9	529	471	513
ピーマン	446	101.3	94.0	364	81.8	76.6	383	386	328
さといも	234	102.0	85.6	302	102.0	98.5	286	311	310
ばれいしょ	2,470	86.5	80.7	199	150.8	175.5	191	198	207
たまねぎ	4,269	75.9	82.1	160	219.2	190.6	146	163	172

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	11月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>長崎産、徳島産、和歌山産を主体として石川産や鹿児島産などの入荷もあった。長崎産と徳島産は月の前半は優品率が高く太物中心の入荷であったが、後半には出荷調整もありサイズは2L、Lを中心とする入荷になった。前段の新潟産や青森産は上旬に切り上がったが、下旬には和歌山産の入荷も始まり、全体としても旬を追うごとに入荷増量となった。月間全体では前年をやや下回る入荷量にとどまり、平年もやや下回った。</p> <p>日中の気温が下がらず、消費は鈍く販売には苦戦した。優品率が高かったこともあり、入荷量が少ないながらも価格は伸び悩んだ。月間の価格は前年をやや下回り、平年は大幅に下回った。</p>
	にんじん 	<p>北海道産の残量を中心として、中旬以降は後続産地の長崎産や鳥取産、千葉産の入荷も始まった。各産地とも太物中心の出荷で、北海道産は残量が多く下旬まで入荷が続いたため、同産の入荷量前年比は1.5倍以上にもなった。月間全体では前年、平年ともかなりの程度上回った。</p> <p>価格は前月までの安値推移の影響が残ったまま入荷増量となり、太物中心で残量入荷が多かったため、月の後半も伸び悩み低迷が続いた。月間では前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>正月商材の香川産の金時人参の入荷も始まったが、安定した入荷となり入荷量は前年を若干上回り、価格は前年をやや下回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産を中心とする入荷に、長野産の残量入荷など、中旬以降には三重産、下旬には愛知産や和歌山産の入荷も始まった。茨城産は潤沢な入荷となったが、近隣の各産地は干ばつの影響で出遅れとなり入荷量は少なかった。月間全体では前年をやや上回り、平年は大幅に上回った。</p> <p>中旬までは量販店からの引き合いも強まったが、日中の気温が下がらず中旬以降の需要が伸び悩み、後続産地の入荷増量に伴って価格は下落傾向となり低迷した。月間では極端な安値であった前年は大幅に上回ったが、平年は大幅に下回った。</p>
	キャベツ類 	<p>愛知産を中心として、茨城産や長野産の残量入荷、大阪産など近隣産地も下旬ごろからスタートした。愛知産は潤沢な入荷で、近隣産地ものは9月下旬の雨の影響で出遅れていたが、春系の出荷も始まり、月間全体では前年をわずかに上回り、平年は大幅に上回った。</p> <p>価格は入荷増量に伴い低迷し、旬を追うごとに下落傾向となったが、極端な安値だった前年は大幅に上回り、平年は大幅に下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>徳島産と福岡産が主体となり、岐阜産の残量入荷などもあった。上旬は秋冬の産地が出遅れて入荷量は少なく、前年をかなり下回ったが、中旬以降は回復傾向となり旬を追うごとに増量し、月間では前年をやや下回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>月の前半の絶対量不足から上旬は単価高となり、旬を追うごとに下落傾向となるも高値推移となった。月間では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に下回った。</p>
	ねぎ（白ねぎ） 	<p>長野産を中心として群馬産、鳥取産、また北海道産の残量入荷や後続の石川産や静岡県産の入荷もあった。各産地とも被害などもなく潤沢な出荷を続け、前年を大幅に上回る入荷量となった。</p> <p>日中の気温が高かったため消費は鈍く、販売は苦戦し価格は低迷した。全旬とも前年を下回る価格となった。</p>
ねぎ（青ねぎ） 	<p>徳島産を中心として高知産や鳥取産、また大阪産など近隣産地の入荷もあった。各地とも生育順調で潤沢な出荷を続け、全旬を通して安定した入荷となった。月間でも前年をかなり上回る入荷量となった。</p> <p>価格は単価安だった前年を上回った。</p>	
レタス類 	<p>兵庫産を中心として、茨城産や長野産の残量入荷や徳島産などの入荷もあった。急な冷え込みと干ばつの影響で入荷量は伸び悩んだ。サニーレタスは福岡産を中心として兵庫産など、リーフレタスは福岡産を中心とした入荷で、レタス同様、急な冷え込みと干ばつの影響で入荷量は伸び悩んだ。月間のレタス類全体では前年をわずかに下回り、平年はかなりの程度上回った。</p> <p>価格は前年の単価安を受けて前年を大きく上回るスタートとなったが、旬を追うごとに下落を続けた。サニーレタスとリーフレタスは、コロナ禍の影響が残り単価は伸び悩み、レタス類全体では前年を大幅に上回ったものの、平年は大幅に下回った。</p>	

果菜類	きゅうり 	<p>宮崎産を中心として、大阪産や高知産などの入荷があった。上旬までは群馬産、中旬までは長野産の残量入荷もあった。天候良く各産地とも順調な出荷を続け、全旬を通して前年を上回る安定した入荷となった。月間全体でも前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。</p> <p>前月までの単価安の影響もあり、量販店での売れ行きが悪く入荷増量も相まって単価安が続いた。月間全体でも前年をやや下回り、平年を大幅に下回った。</p>
	なす 	<p>千両系は高知産を中心として岡山産などの入荷、長茄子は福岡産を中心として熊本産の入荷もあった。各産地とも上中旬は潤沢な出荷となり入荷増量したが、下旬には入荷減量となった。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年はかなりの程度上回った。</p> <p>売れ行き悪く単価安で、下旬の入荷減量も価格は伸び悩み月間でも前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。</p>
	トマト 	<p>愛知産を中心として岐阜産や千葉産の残量入荷があった。後続産地の熊本産や福岡産の入荷も始まったが、出遅れて特に熊本産の入荷量が少なかった。愛知産は順調な入荷を続けて旬を追うごとに入荷増量、前年を大きく上回る入荷量であったが、月間全体では前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は入荷量が少なかったことから高値スタートとなった。後続産地がスタートしたが入荷量が少なく、中旬に下落した後、下旬に再び上伸となった。月間でも前年をかなり大きく上回り、平年もやや上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産と高知産を主体とする入荷であった。施設産地が前倒しの出荷となり中旬以降に入荷増量となった。月間全体では前年をわずかに上回り、平年はかなりの程度下回った。</p> <p>量販店の売場がなく過剰気味となり、全旬とも単価安での推移となった。月間でも前年、平年とも大幅に下回った。</p>
土物類	さといも 	<p>愛媛産を中心とする入荷であった。山形産や埼玉産などの入荷もありLサイズ中心の潤沢な入荷となった。輸入の中国産の入荷も潤沢にあり、月間全体では前年をわずかに上回ったが、平年はかなり大きく下回った。</p> <p>価格は安定的な推移となり、前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は北海道産を中心として下旬には長崎産の入荷も始まった。北海道産は不作で産地残量、入荷量とも少なく、長崎産は9～10月の干ばつの影響で作柄悪く、小玉傾向で前年を大きく下回る入荷量となった。メークインは北海道産のみの入荷で、前月に引き続き干ばつの影響で産地出荷量が少なく入荷量は少なかったが、前年も少なかったため前年はかなり上回った。ばれいしょ全体では前年をかなり大きく下回り、平年も大幅に下回った。</p> <p>丸芋、メークインとも絶対量不足から全旬とも単価高での推移となった。ばれいしょ全体では前年、平年とも大幅に上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産を中心として兵庫産の入荷があった。北海道産は干ばつの影響で前月に引き続き入荷量が少なく、前年を大幅に下回った。兵庫産は例年に比べて正品率が低いため、週3回のみ入荷となった。月間全体でも前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>絶対量不足から単価高が続き、旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年の2倍以上の価格となり、平年も大幅に上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

#### (4) 首都圏の需要を中心とした1月の見直し

全国的に好天が続き天候は安定して推移したため、東北や北海道、高原産地などの切り上がり時期が例年より後ろに延びた。そのため関東や西南暖地の秋冬野菜、冬春野菜と夏秋産地が競合して価格は安めとなった。それでも関東産の重量野菜の前進による急増がなかったことで、大幅な価格低迷は避けられた。重量野菜産地が出荷を控えた部分もあると推測される。

1月はトマトやばれいしょ、たまねぎは若干不足気味であろうが、その他の品目はこの時期に起こりがちな価格上昇はないと予想される。果菜類は重油代の高騰下、厳冬期でもあり徐々に供給が細って価格は上昇気味に推移すると予想される。コンビニエンスストアのおでん需要により、低迷しただいこんは徐々に価格上昇基調になると予想している。

#### 根菜類



だいこんは、神奈川産は雨が多かった時期の影響で病気が散見され、例年よりも秀品率は低下している。11月の価格低迷もあって、年末年始は平年を下回る出荷と予想している。千葉産の現状は生育順調で、若干前進気味である。年明けは厳冬期に入ることもあり、年内よりも減ってくると予想される。適度の降雨もあって平年並のL・2Lサイズ中心と予想される。徳島産は12月は単価安から抑え気味に出荷している。生育は順調で、1月も引き続き潤沢に出荷できるであろう。2Lサイズ中心で、3Lサイズも例年より多くなる見込みである。静岡産は12月中旬から全産地の出荷が揃って1月中下旬がピークである。2Lサイズ中心であるが、3Lも多くなろう。切り上がりは2月末頃から3月上旬と予想される。

にんじんは、千葉産の現状は例年より早めで、11月下旬から12月にピークになると予想される。年明けは寒波が厳しく、凍害がなければ順調に入荷し、Lサイズ中心と予想している。埼玉産は12月がピークで1月には減りながら推移し2月初め頃までと予想している。初めは

Lサイズ中心であるが、12月下旬から2Lサイズも増えてこよう。生育は順調であるが、前進傾向となると早めに切り上がる可能性もある。

#### 葉茎菜類



キャベツは、愛知産の生育は順調で、豊作傾向となっている。冬春シーズン中は1月が最も少ないが、暖冬傾向となれば1月の出荷は伸びることもある。Lサイズ中心で例年並である。神奈川産は大雨や強風により根が損傷して一旦生育が止まるなど、現状は遅れ気味である。それでも11月下旬に入ってから好天で順調に推移して年末年始は平年並みの出荷となろう。千葉産は現状までは順調な出荷が続いているが、気温の低下に伴い、12月中下旬から減り始めると予想している。1月としては平年並みの出荷を予想しているが、価格の低迷もありMサイズ以下の出荷はかなり少なくなると予想している。静岡産の「キャンディキャベツ」は12月10日以降から出荷が始まるが、ピークは1月23日以降である。2月いっぱい終了するが、比較的暖冬気象で推移して生育順調である。作付けは若干増えている。

はくさいは、茨城産の生育は問題なく順調であるが、葉の上部を縛る作業の人手が確保できず、霜枯れを起こす恐れがあるため年明け以降は減る可能性がある。

ほうれんそうは、埼玉産は年末に一旦ピークが来て、1月は減り気味に推移し、2月から3月にかけて再び増えてくると予想している。厳冬期は生育に時間がかかるためであるが、暖冬気味に推移すると前進から例年を上回る展開も予想される。作付けは前年を上回っている。栃木産は生育順調であるが、12月にピークが来て年明けは徐々に減りながら推移しよう。1月にピークとなる「ちぢみほうれんそう」は面積を減らしている。2月に入り減少し始め、月末頃に切り上がる見込み。

ねぎは、千葉産は例年どおりの展開であり、年内は出荷が揃わなかったが1月と2月がピークである。今後は2Lが増えてくるが、冷え込みが強ければLとの比率は同じくらいになると予想される。埼玉産の現状は病害もなく順調で、

年明け出荷は増えてこよう。12月上旬から1月にかけてがピークで、2月から3月は徐々に減りながら推移しよう。作付けは前年並であり、量的にも前年並と予想している。

レタスは、香川産は現状までは適度の降雨と高温気味で推移したことから、生育は順調で前進気味である。それでも12月に入り冷え込んできて、量的には落ち着いてきている。12月には玉肥大も抑えられてくると予想される。今後は天気次第であるが、12月～翌2月はピークが続くと予想している。厳冬となれば、出荷に山谷ができることも予想される。兵庫産は12月にピークが来て、1月は厳寒期でもあるため徐々に減りながら推移しよう。生育は順調であるが、12月の初めに集中豪雨があり一部圃場<sup>ほらば</sup>で被害を受けた。そのため1月の出荷は前年を若干下回る可能性もある。静岡産は12月にピークとなり順調な出荷が続いている。年明けはやや減るが、引き続き一定のペースで2月まで推移し4月の初め頃に切り上がると予想される。2Lサイズ中心でその次に多いのはLサイズと予想される。

## 果菜類



きゅうりは、千葉産は10月から11月の好天で生育順調である。当面のピークは12月10日～15日で、その後1月も連続して前年を上回る出荷と予想される。高知産の生育は順調で12月～翌1月は前年を若干上回ると予想している。12月20日前後に2回目のピークが来て、年明けは常時多くなってくると予想される。宮崎産は現状までは横ばいで出荷できており、12月15日頃から増えてこよう。年明けも減ることなく、そのまま一定ペースで出荷されると予想される。ここ数年は暖冬で11月に前進して多くなり、その後伸び悩むことはあったが、今年は安定している。

なすは、高知産の現状は病虫害の発生もなく、生育順調である。大きな天候の崩れがなければ前年並と予想される。福岡産のながなすは序盤は多めの出荷で始まったが、12月に入り寒さから実が細くなっている。年明け1月も寒さから例年と同様少なめの出荷と予想される。2月

には日長によって緩やかに伸びてこよう。

トマトは、熊本産が例年より少なめの出荷となっているが、ここに来て追い付いてきている。花も十分付いており、12月から1月は平年並みと予想される。1月の出荷量は12月と同等と予想している。愛知産の現状は生育順調であるが、定植時期の天候不順の影響で小玉傾向である。1月には植替え時期を迎えるため、12月の6割程度と少なくなろう。引き続きMサイズ中心と予想される。

ピーマンは、宮崎産は生育の初め頃に降雨が多く、やや徒長気味で木のバランスが崩れた。量的には12月中旬から回復に向かうが、1月は前年を下回ると予想される。農家によっては温室の温度を抑えることも予想される。平年並みに戻るのはやや先になる可能性が大である。茨城産は温室ピーマンのみとなるため、12月より減ってくると予想される。天候に恵まれて生育順調で、例年並みの出荷と予想される。ただ重油代の高騰から、温室を18度にキープできない農家が多くなると、例年を下回ることも想定される。

## 土物類



さといもは、埼玉産は貯蔵物が年明けに出荷されるが、年内に続き前年を上回る出荷となると予想される。台風の被害がなかったことや病気の発生もなかったことが幸いした。

たまねぎは、北海道産は11月の出荷は不作の影響により前年の80%程度となった。年明けも同様に少なく、5月までLサイズ中心に計画販売していく。静岡産は11月の好天による少雨の影響が心配されるが、年明けから始まる「ホワイト」と「黄玉」の生育は順調である。ホワイトのピークは1月で、葉付きで出荷される物が多く2月にはかなり少なくなると予想される。黄玉のピークは2月となると予想されるが、いずれも作付けは前年並である。

ばれいしょは、北海道産(ようてい)道央の21年産「男爵」は前年の70%程度と不作で、年明けは急減すると予想される。Lサイズ中心で、次はL、Mと小玉傾向である。同産(芽室)十勝の「メークイン」は面積の減少もあり前年

の80%の生産量である。例年は3月までの出荷となるが、今年度は2月中旬に早めに切り上がると予想される。中心サイズはLであるが、小玉傾向である。鹿児島産の「赤土新馬铃薯」は1月下旬から平年並みに始まる予想される。3月が出荷のピークと予想され、今のところ生育順調である。

## その他



かんしょは、徳島産の21年産は平年作であり、12月に続き1月も多く出荷されると予想され、Lサイズ中心と肥大はまずまずである。千葉産は「高系14号」系の「紅高系」の販売となるが、ほぼ平年作である。9月の早掘り物は遅れたが、後半物は肥大して盛り返してきた。Lサイズ中心である。

しゅんぎくは、千葉産は大きな台風もなく生

育は順調である。年末にピークが来るが、1月も潤沢な出荷ペースを保てると予想している。気温が平年を下回る日が続くと、昨年を下回る出荷も予想される。

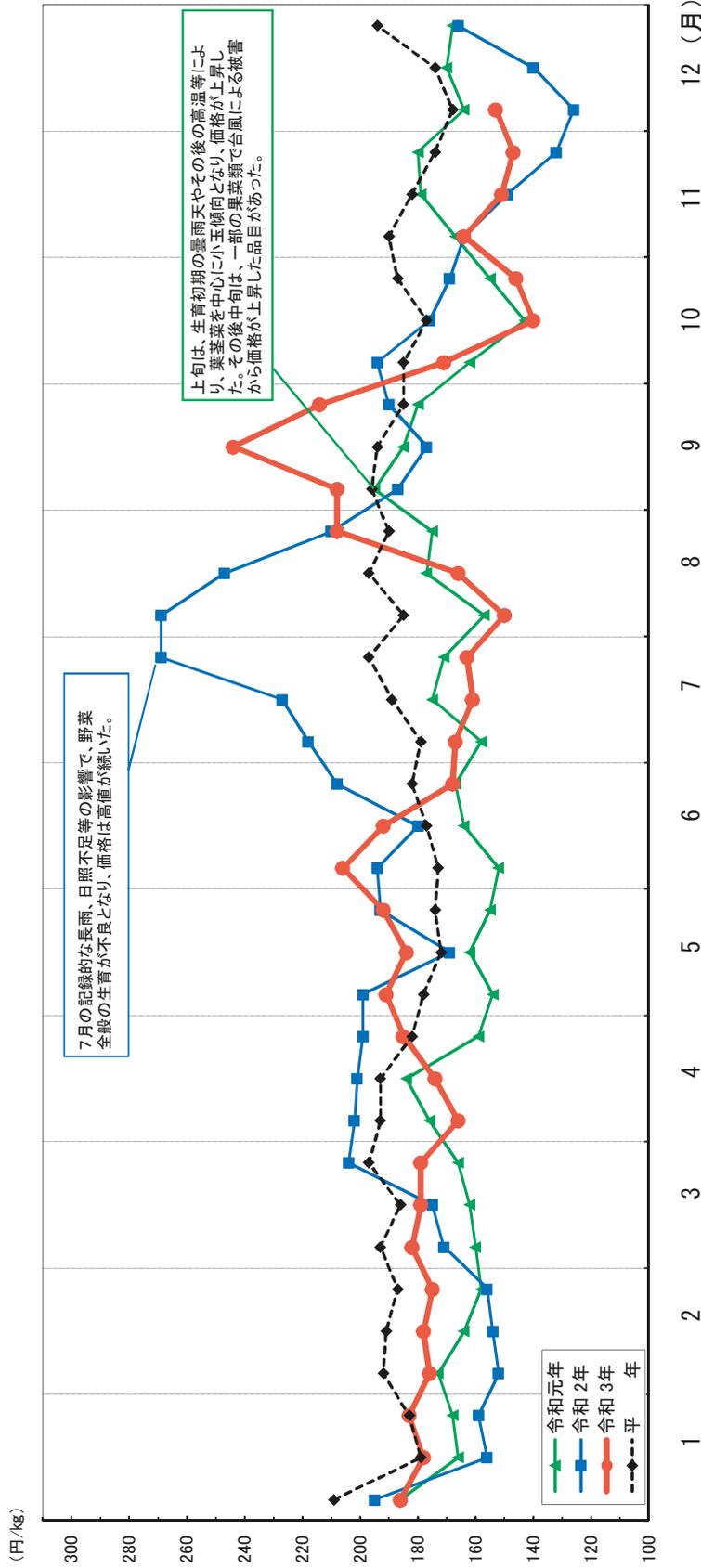
ブロッコリーは、埼玉産の10月の出荷は半作に近い状況で、12月に回復してきて1月は平年並みに出荷できると予想している。例年1月はそれ程多くない時期である。愛知産は現状は冷え込みもあって生育は止まったが、降雨もあって回復してくると予想される。1月、2月にピークを迎える平年並みの出荷と予想している。形状も例年どおり美しく仕上がっており、12玉のLサイズ中心の入荷と予想される。

豆類は、鹿児島産の「実えんどう」「スナッブえんどう」は10月から出荷が始まっているが、「そらまめ」は例年より遅れて12月6日から始まると予想される。

(執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一)

## (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

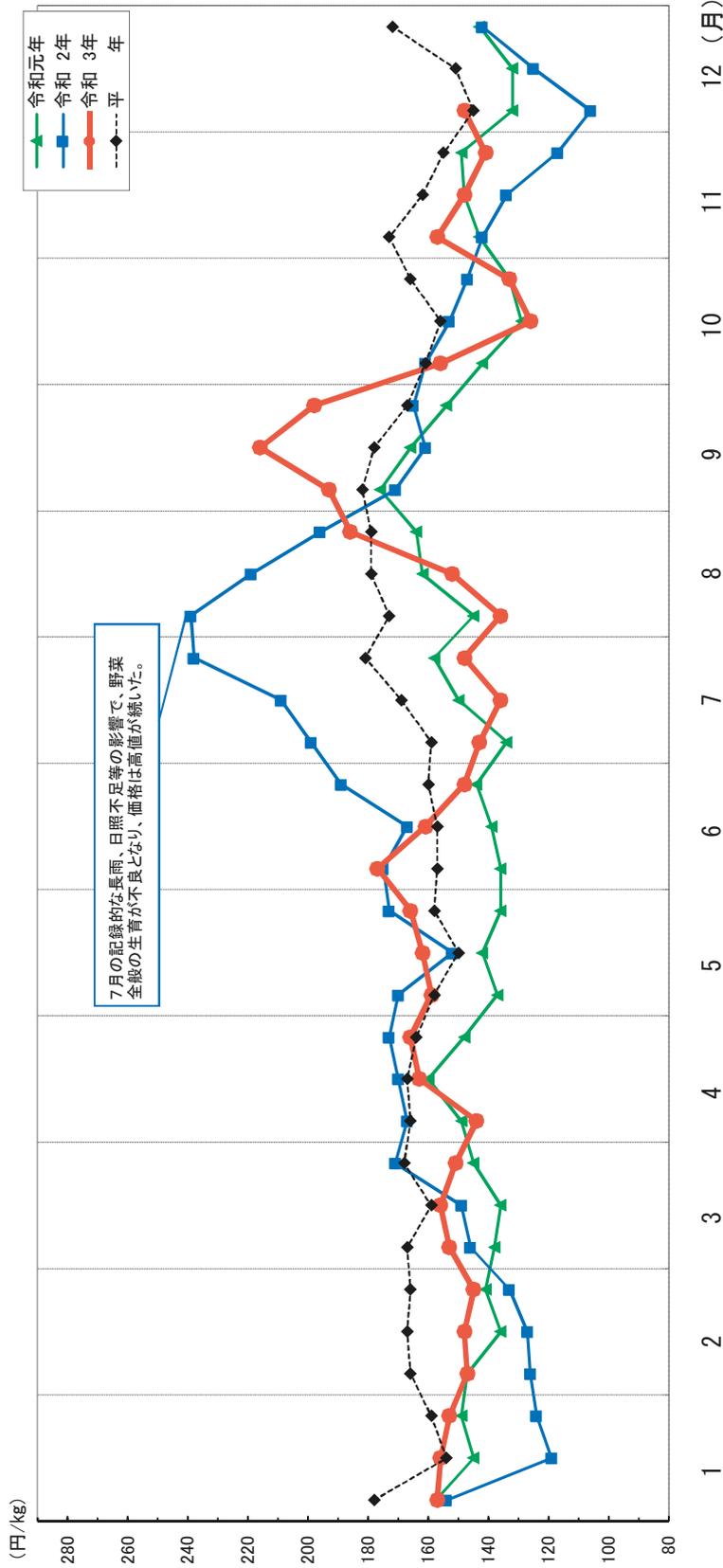
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬																																		
令和元年	186	166	168	173	164	158	160	162	166	176	184	159	154	162	155	152	164	167	158	175	171	157	177	175	195	185	180	162	143	155	167	179	180	164	170	168
令和2年	195	156	159	152	154	156	171	175	204	202	201	199	199	169	193	194	180	208	218	227	269	247	210	187	177	190	194	176	169	164	149	132	126	140	166	
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	166	174	185	191	184	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153				
平 年	209	179	183	192	191	187	193	186	197	193	193	182	178	172	174	173	177	182	179	189	197	185	197	190	196	194	185	185	177	187	190	182	174	168	174	194

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成28年～令和2年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

# (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬																																	
令和元年	157	145	149	136	141	138	136	145	149	160	148	137	142	136	136	139	144	134	150	158	145	162	164	176	166	154	142	129	133	143	148	149	132	132	143	
令和2年	154	119	124	126	127	133	146	149	171	167	170	173	170	152	173	175	167	189	199	209	238	239	219	196	171	161	165	161	153	147	142	134	117	106	125	142
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148		
平年	178	154	159	166	167	166	167	159	168	166	167	164	158	150	158	157	157	160	159	169	181	173	179	179	182	178	167	161	156	166	161	162	155	145	151	172

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成28年～令和2年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。